

Title	日持上人の大陸渡航について(上) : 宣化出土遺物を中心として
Sub Title	Travels of Nichiji, a Japanese Buddhist priest in Kamakura period, to Yuan China (I)
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	2009 - 1957
Jtitle	史学 Vol.29, No.4 (1957. 3) ,p.1(365)- 41(405)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19570300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日持上人の大陸渡航について (上)

—宣化出土遺物を中心として—

序 言

前 嶋 信 次

日蓮上人の傳記は枚擧に困難なほどある。昭和六年ころ調べたものによつても百六十餘種に達するといっている。雄大な理想をふりかざし迫害と闘いぬいたその生涯は波瀾に富むとともに、馬蹄や濤聲、絶叫や劍戟の響のうちにそこはかとなき靜寂さをもたたえているから多くの人の胸をうつのであろう。

近年フランスのルノンドー氏 G. Renondeau が文部省後援のもとにギメー博物館の出版物の一つとして世に問うた「日蓮の教義」にも、その序論に「日本の生んだすべての偉大な僧達のうち、日蓮ほど力強くまたオリジナルな人格を示しているものは一人としてないに違いない。かれは、これこそ誤りであると考えた教義に對しては、きびしい非妥協的態度をもって攻撃した。そのような教義を説く人々にたいし、彼ほどの大膽さと氣力とをもつてはっきりと思うところを言い切ったものは他にひとりとしてなかった。……彼ほどにその祖國の運命と、その宗門の光榮とを密接に結びつけたものもまた他には一人としてなかった。日蓮にとっては、その祖國の繁榮の根本的條件は、國をあげて出来る

だけ速かに妙法に歸依することであつた。日本を苦しめた地震・飢饉その他もろもろの災害こそ、この國が宗教上の誤りをおかしている當然のむくいと見て、間もなくこの國は外敵の侵略をうけるであろうと豫言した。果然、數年ののちの元軍の來襲は彼の豫言の正しかつたことを示したので、いよいよその自信を固めることとなるのであつた。彼は佛教をその正法のうちに復興し、日本をば本源地として、そこから眞理が着々と世界の残りの部分をも被いとることを夢みていたのである。」

と述べてある。日本の生んだ最もオリジナルな宗教家と云いうるかどうか知らぬが、少くもその一人であることは議論の餘地がない。日蓮上人も知己を千載ののち、遠く泰西の異境に得たと言つてよからう。彼につき多くの傳記はあるけれども、最も人の心をうつのは、やはり、その遺文集で、自らその經歷を物語つてゐる部分がかなり多くあるようである。ことに晩年の作たるいわゆる「種々御振舞御書」という一篇にはそのような要素がこまやかで、一言一句が人の肺腑をうつような名文章である。その中に「各々我が弟子と名のらん人々は、一人も臆し思はるべからず。親を思ひ妻子を思ひ所領をかへりみることもなけれ。……各々思ひ切り給へ、此の身を法華經に替ふるは石に金をかへ、糞に米をかふるなり。佛滅後二千二百二十餘年が間、迦葉・阿難等、馬鳴・龍樹等、南岳・天台等、妙樂・傳教等だにも、いまだひろめ給はぬ法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に一閻浮提にひろませ給ふべき瑞相に、日蓮魁したり。和黨共、二陳三陳つづきて、迦葉・阿難にも勝ぐれ、天台・傳教にもこえよかし。わづかの小島の主等が威嚇さんを怖じては、閻魔王の責をばいかんがすべき。佛の御使と名のりながら臆せんは、無下の人々なりと申しふくめぬ。」という一節がある。その門下に氣節の激しい傑僧、豪僧を輩出したのは當然のことであろう。とりわけてその

六老僧の一人蓮華阿闍梨日持上人は、師の示寂後十四年目に海外宣教の雄圖を抱き、孤身ひよう然と北海の波を越えて去った。このような人物をその門下から出したことは、日蓮の理想から見て、これまたさして不思議とするに足らぬ。しかし大陸に赴いた後の日持の運命は果してどうであつたらうか。津輕から蝦夷にわたり、更に大陸に渡つたらしいというのみで全く消息を絶つてしまったところから、後世に至つて様々の臆説、傳説が生じたけれども、これまではこれといつてきびしい批判に堪えうるような材料は發見されなかつた。本篇は、主として大陸渡航後の日持の事蹟につき、從來の傳説や、諸家の研究をも一覽し、その後、一九三五年ころ萬里の長城に程近い宣化の町の一隅から出土した上人關係の遺物類について卑見を述べたものである。考察の未熟な部分や解釋しかねる箇所も多々あるが、大方の高教を仰ぐよすがとして敢て發表する次第である。

一、その 經 歴

日持上人渡海前の事蹟は多くの書に現われているし、本篇の主目的とするところでもないが、順序上、ここに萬延元年序文、慶應三年刊の小川泰堂著「日蓮大士眞實傳」から引用することとする。

「爰に駿州庵原郡松野の邑主松野六郎左衛門といふ人あり。同國上野なる南條兵衛の縁家なるを以て、高祖大士の檀越となり、夫婦ともに歸依淺からずありけるが、松千代といふ一子あり、はじめその母夢に蓮華の咲くと見て懷妊せり。八歳の時四書を誦んじ、生長にしたがって、十三經・十七史・諸子百家の書をよみ、よく文章をつづり、性質凡人ならず、名利を物の數とせず出家とならん事をねがひ、比叡山に登りて剃髮しけれども、かの山の宗法心に協はずとて本國

に歸り、ある時岩本實相寺に遊んで學頭智海法印に此事を語る。智海聲をひそめて、今鎌倉に日蓮といふ名僧あり。實に當今の英雄なり。我前頃この山の沙彌伯耆坊をすすめて其弟子とならしむ。今は日興と改名して隨身するよしききぬ。御身も佛教の根元をきはめんとおぼさば鎌倉へゆき給へとありけるにぞ、夫こそ近き頃わが兩親の歸依ある僧なれば因縁淺からずとて、松葉が谷に來り、事の顛末を物がたりけるにぞ、大士も別けて喜び給ひ、蓮華院日持と名を賜ひき。此時二十一歳、後年六老僧の一人に加へられ能登阿闍梨日持聖人と稱したる英傑なり。

松野六郎左衛門本願として其地に一寺を建立し、日持聖人を開山とす。(中畧) 日持聖人は高祖大士入滅の後つらつら思召やう、(中畧) 大法今大半國中に弘まったり。此國の弘通は日昭・日朗にてはや事たりぬべし。閻浮提廣宣流布とあるからは、日本一國は物の數ならず、願くは我れこれより外國異朝に渡り、佛縁うすき蠻夷の諸國を弘通せんと大願を發し給ひ、今年永仁二年甲午九月十三日、高祖の十三回忌を我が山に營み、十月十三日御正當身てしやうとう延山に登て大士の御廟を拜して御暇を告げ奉り、明れば永仁三年正月元日、齡加はつて四十六歳、元朝の喜びに盃を擧げ、法を弟子に譲り、寺を檀越に任せ、唯一人法衣を振って旅立ちたまひ、奥州津輕より弘前にかかり、路の傍の大石に題目を書いて、これを日本の名残りとして、松前より蝦夷に渡りて行衛知られず成給ひける。ここをもって日持聖人は今に正月元日(四)旅立の日をもつて命日正當と仰ぎ奉るなり。

右の傳記は日持の前半生を大體わかり易く書いてあるが、細部に至ると、そちこちに疑問が起らぬでもない。生年が後深草天皇の建長二年(一二五〇)であることは確實で、日蓮の廿九歳のときにあたる。生地が駿河の國松野村であることも疑うべくもないようであるが、果してその豪族松野家の出であったかどうかについては異説がある。享保年間

に仙臺の日潮が撰した「本化別頭佛祖統記」卷十、「日持尊者世家」には、

「諱は日持、蓮華阿闍梨と呼ぶ。駿州庵原郡松野邑の人なり。未だ姓氏を詳にせず。」とあるし、影山堯雄師の「佛教海外傳道の始祖日持上人傳」^五にも「幼名松千代、姓氏いまだ明かならず。神童のほまれ高きにより邑主松野六郎左衛門に愛さる」としてある。しかし、生地松野村をたずねて見ると、故老たちは皆、二代目松野六郎左衛門の次男であったと語りつたえ、松野家の屋敷あとにその一族とならんで日持上人の墓もある。果してどちらの説が當っているか、今はさだかには知り難いのでこの問題は兩説を並記するだけにしておこう。松野村は東海道線岩淵驛から、富士川の右岸にそい、風光の美しい路を一里あまりさかのぼったところにある。現在圓應山法蓮寺のあるところは昔の松野氏の屋敷跡で、別に藏人屋敷とも呼ばれている。この寺の記録や松野村郷土誌によると、初代松野六郎左衛門は建曆二年（一二一二年）に鎌倉に生れ、北條時政に仕え、建保年間に藏人職に任ぜられ、貞應の頃、松野に引退し、その後、地頭に任ぜられたとある。^六しかし建曆二年生れとすると、建保年間はその二歳ないし七歳の間であり、かつ北條時政はその四歳のとき世を去っているから。とてもこれに仕えるというようなことはあり得ないと思う。さらに同郷土誌によると、二代目六郎左衛門を名乗った行易は、初代六郎左衛門の長子で、少時父を失い母尼日女御前の訓養をうけ、長じて母と共に日蓮聖人に歸依した。六位藏人に任ぜられ、在京數年、その室は三澤家より出で、窪尼御前とよばれた。これが日蓮聖人から松野殿女房と敬稱された女性であつた。この夫婦の間に生まれた長男は家をついで三代目松野六郎左衛門行成と名乗り、次男が佛門に入って、後の日持上人となったという。また大正年間にその屋敷跡の一隅から古塔が發掘されたが、それには、

父 法號 法蓮尊儀 弘安三年庚辰六月八日寂

母 法號 妙蓮尊尼 弘安十年丁亥三月一日寂

と刻してあつた。これが二代目六郎左衛門夫妻、すなわち日持上人の父母のものであるとしてある。御遺文集には「日女御前」にあてた日蓮の親書が三通、「窪尼御前」にあてたものが七通ほどあるが、この日女御前は池上宗仲の室であり、窪尼御前は持妙尼ともよばれ駿州富士郡久保の人であつたといわれている。郷土誌はこれらを混同しているのではなからうか。しかし、この松野家一族が深く日蓮に歸依し、しばしば供養・音信を重ねたことは日蓮その人の遺文によつて知ることが出来る。昭和七年に本化聖典普及會から出版された御遺文集によると、松野家にあてられた日蓮の親書は都合十一通ほどあつて、年代は建治二年（一二七六）二月から弘安三年（一二八〇）九月に至る満四年七カ月にわたつてゐる。宛て人は、(一)、松野殿（建治二年二月。柑子一籠種々物送給候云々）(二)、松野殿（同年十二月。鷲目一結、白米一駄、白小袖一送給畢ぬ。抑此山と申は南は野山漫々として百餘里に及べり。北は身延山高く峙ちて白根が嶽につづぎ、西には七面と申す山峨々として白雪絶えず。人の住家一字もなし。……かかる所なれば訪人も希なるに加様に度々音信させ給ふ事不思議の中の不思議也。）(三)、松野殿（建治二年）(四)、松野殿（建治三年九月。鷲目一貫文、油二升、衣一、筆十管給候。今に始めぬ御志申盡がたく候へば、法華經、釋迦佛に任せ奉り候云々）(五)、松野殿（建治四年二月。種々の物送給候畢ぬ。山中のすまゐる思遣せ給て、雪の中ふみ分て御訪ひ候事、御志定て法華經十羅刹も知食候覽云々）とある五通の外に「種々物御消息」（弘安元年七月。みなみなものをくり給て法華經にまいらせて候云々）「淨藏淨眼御消息」（弘安三年七月。きこめの俵一、瓜籠一、根芋品々の物給候畢ぬ。……皆人の憎み候日蓮を不便とおぼして、か

く遙々と山中へ種々の物送りたび候事一度二度ならず、ただごとにあらず。偏へに釋迦佛の入替らせ給へるか。又をくれさせ給ひける御君達の御佛にならせ給て、父母を導かんために御心に入替らせ給へるか云々」とある二通もまた松野氏にあてたものである。この最後の消息は松野氏がその子に先だたれ、傷心のみあまり、ひとしお心をかたむけて佛門に歸依し、日蓮に奉仕したらしい事情を伝えるもので、そのあとに「甲斐公（筆者註、日持のこと）が語りしは、常の人よりもみめ形も勝れて候し上、心も直くて智慧賢く、何事に付てもゆゆしかりし人の、疾はかなく成し事の哀れさよと思ひ候しが、又情思へば、此子なき故に母も道心者となり、父も後世者に成て候は只とも覺え候はぬに。又皆人の惡み候法華經に付せ給へば、偏へに是なき人の二人の御身に添て、勧め進せられ候にやと申せしが、さもやと覺え候。前々は只荒増あらましの事かと思て候へば、是程御志の深く候ひける事は始て知り候云々」とある。また松野家の女性で、聖人から親書を送られたものに、松野殿後家尼御前（弘安二年三月）と松野殿女房（弘安二年六月と同三年九月）との二人がある。弘安三年九月一日、後者にあてた書簡の末尾に「法華經は初は信ずる様なれども後遂ぐる事かたし。譬へば水の風にうごぎ、花の色の露に移るが如し。何として今までは保たせ給ふぞ。是偏へに前生の功力の上、釋迦佛の護り給ふ歟。たのもしし、たのもしし。委くは甲斐殿申すべし」としてある。この書狀にそえて日持からも詳しい書簡が送られたものと想像される。

右のように日蓮の書簡から、はっきり知り得る松野家の人々はその何代目かの當主夫妻（松野殿と松野殿女房）とその母にあたるらしい「松野後家尼」とである。この人々と日持とが親しい關係であったことは、よく推察し得るが、果して松野後家尼が上人の生母で、松野殿が實兄であったかどうか、はっきりしたことはわからない。佛祖統記（卷二四）

には「松野六郎左衛門入道は上野時光の伯父、駿州庵原郡松野の邑主なり。岩本の智海および蓮華阿闍梨が高祖（日蓮）を欽奉するを視て、志を高祖に通じ、戴髮の弟子となる。高祖の滅後、一梵宇を構えて酬恩の地となす。今の松野山永精寺これなり」としてある。これは松野郷土誌のいう三代目六郎左衛門のことであろう。上野時光とは駿河國富士郡上野の豪族南條七郎次郎のこと、父の兵衛七郎が深く日蓮に歸依した感化をうけ、殆ど一族をあげてその教を奉じた篤信の士であつた。

松野氏の子孫は現在には松野村には居らず、山梨縣身延町椿という戸數十二、三戸の部落に三戸残っている。松野眞一(九)氏の家がその本家にあたり、松野村から移住したときに従つてきたという吉野、早川二家の子孫も残っているという。

日蓮の示寂後、大陸にわたるまで日持は主に松野村に住んでいた。それは三代目松野六郎左衛門行成が大士入滅の翌年（弘安六年―一二八三）にその領内に吉地を下して一寺を建て、彼を開山として迎えたからである。昭和三十年十月筆者はこの寺（現在の妙法山永精寺）を訪れて見た。部落を外れたところの丘の中腹にあり、後には緑こまやかな山を、前方には廣々とした田圃を見渡し、閑寂の氣の流れる愛すべき古刹であつた。寺傳によると創立のときは妙法山蓮永寺と號していたという。これが今、永精寺と名をあらためている理由は、戦國くつのがの争亂を経てこの由緒深い寺院が荒廢してゐるのを歎いた徳川家康の側室阿萬の方（正木氏、養珠院日心夫人と呼ぶ。紀伊頼宣・水戸頼房の生母）が元和元年（一説に同四年または六年）に今の静岡市沓谷くつのがに宏壯な寺院を營み、これに寺號を移して貞松山蓮永寺としたからであつた。沓谷の蓮永寺も、松野の永精寺も、みな開基は日持上人とし、その松野を旅立たつた正月元日を命日として今も供養を怠らぬことは同じである。

松野郷土誌や村民の語り傳えによると、蓮永寺の寺號を持ち去られることは心外であつたらしい。日持去つて後、高弟日教等がそのあとをうけて寺を守り、第十一世日能に及んだとき、寺號移轉の議が起つたのである。檀徒はこれに反對し、たとえ死すとも諾しがたき信念をもつて哀願し、やつと妙法山の山號のみを残すことを得たと言つてい⁽¹⁰⁾る。移轉の理由は養珠院御胎文（静岡蓮永寺所藏）に「駿河の國沓谷貞松山蓮永寺は同じ國松野の日持上人の舊跡大破に及び候故我等權現様より右貞松境内残らず拜領致し彼の寺を移し候」とある如く、戰國時代の甲駿地方の兵亂にあつて松野の寺門が荒廢したためもあつたが、また沓谷の寺をもつて駿府城の鬼門除けとするためでもあつたとい⁽¹¹⁾う。

種々の日蓮傳には、いうまでもなく處々に日持のことが書かれている。例えば文永八年九月、日蓮が捕えられて龍の口で斬られようとしたときには、日蓮上人一代圖會（安政五年、中村經年著）によれば日興、日向、日頂らと師の教戒をうけて龍の口には行かず「日昭阿闍梨に濱の窮巷に従ひ、蟄居閉塞し心を堅うし、節を持し眞を護り、高祖啓運し給ひて嘉會の時をここに俟つ云々」とある。⁽¹²⁾師が佐渡に流されたときも、文永十年、佐渡の塚原から一の谷^{さつ}に移つて近藤清久の持佛堂に居たときに、日持もはるばるとそのもとを慕い赴いてかしばいたとい⁽¹³⁾う。翌文永十一年三月には師の赦免の報を得て、これに従つて鎌倉にかへつたごとく、その五月、日蓮が甲州身延山に向つたときも日興・日向・日頂・日蓮その他の人々とこれに従つたとある。⁽¹⁴⁾

日蓮が身延に幽棲していたころは日興らとともに駿河國方面での布教にも努力した如くで、弘安元年三月某日に、日興・日持・賢秀・承賢の連名で訴え出た「四十九院申狀」には「一駿河國蒲原ノ庄四十九院ノ供僧釋日興等謹申ス。爲⁽¹⁵⁾寺務二位律師嚴誓以⁽¹⁶⁾日興並日持承賢賢秀等所學法華宗稱⁽¹⁷⁾外道大邪教奪⁽¹⁸⁾取往古住坊並田畠令⁽¹⁹⁾追⁽²⁰⁾出寺内無⁽²¹⁾謂子

細事……而嚴譽律師狀云、四十九院内日蓮弟子等令居住之由有、其間、彼黨類乍學佛法、同外道之教、令改正見、住由邪義旨、以^{モツテ}外次第也。大衆等令評定、不可^レ令住^ニ寺内也云云、因^テ茲日興等忽被^レ追出^ニ年來之住坊……^(一六)としてある。しかし日蓮が身延でしたためた書信にしばしば「甲斐公」とよばれているのが日持に外ならぬのであるから、身延に居り、師の傍に暮したときの方が多かったかと思われる。弘安五年(一二八二)十月、日蓮は武藏池上で病あらたまつたとき日昭・日朗・日興・日向・日頂・日持を六老僧と定め、異體同心に妙法廣布・天下泰平の志願を果せと遺囑し、他の人々にはわが亡き後はこの六人をわが如くに仰ぎつかえよと諭されたという。繪入傳記本には臨終の日蓮を圍む人々の中に日持の姿がえがかれているものがある。^(一八)日興の「宗祖御遷化記録」によると、

弘安五年 丙午 九月十八日武州池上入御 ^{地頭衛門 大夫宗仲} 同十月八日本弟子六人被^ラ定置^メ云々日興一筆也 ^{此狀六人面可^レ帶}

定

- 一 弟子六人事不次第
- 一 蓮華阿闍梨 日持
- 一 伊與公 日頂
- 一 佐土公 日向
- 一 白蓮阿闍梨 日興
- 一 大國阿闍梨 日朗
- 一 辨阿闍梨 日昭

右六人者本弟子也、仍爲^チ向後^ニ所^レ定如^レ件

弘安五年十月八日

としてある。^(二九)示寂は十三日辰の刻で、「即時に大地震動す」と日興はしるしている。また「同十四日戌時御入棺 日朗 日昭 子時御葬也」とあるが、その葬列の次第もまた諸書にくわしい。日興の記録では、先火、大寶華、幡、香、鐘、散華、御經、文机、佛、御はきもの順、その次が御棺で、「御輿也」と説明し、その前陣が大國阿闍梨(日朗)、左が侍従公、治部公(日位)下野公(日忍)蓮華闍(日持)の順、右が出羽公、和泉公、但馬公、卿公、の順、後陣は辨阿闍梨(日昭)左が信乃公、伊賀公、攝津公、白蓮阿闍梨(日興)の順、右が丹波公、大夫公、築前公、輔公(別本に帥公)の順、あとから、天蓋、御大刀、御腹巻、御馬が續いたとしてある。同じく日興の「御遺物配分事」によれば、^(三〇)
御馬一疋、小袖一、手鉢^{テホコ} 蓮華阿闍梨
としてある。

遺言によつて遺骨は身延山に葬られた。六老僧はそれぞれ廟所のほりに庵室をかまえて、他の高弟等とともに一月交替で輪番にその守護にあたることになった。日持の輪番は毎年五月で、庵室は本應院(窪の坊)であつた。しかし、この輪番守塔という制はあまり長くは續かなかつたらしい。弘安八年に大檀越たる南部(波木井)實長がこれを廢して久遠寺の住職を定めることを提議し、六老僧にはかつた。日興が高祖の遺命にそむくとして強硬に反對したほかは、他の五人はこの案に賛成したので、正應元年(一二八八年)に日向が推されて久遠寺の主となつたといふことであるから守塔輪番の行われたのは足かけ七年間であつた。日興はここにおいて身延を去り、駿河富士郡の南條氏に迎えられて大

石寺を建て、教團の分裂を招いたのであるが、これより日興は日持とも不和になったらしく思われる。永仁六年の「白蓮弟子分與申御筆御本尊目錄事」のうち「松野の甲斐公日持は日興最初の弟子なり。而して年序を経て後、阿闍梨號を給い、六人の内に召具せらる。蓮華阿闍梨これなり。聖人御滅の後、白蓮に背て五人一同天台門徒となれり」とある。(三三二)永仁六年といえばすでに日持が行き方知れずなつてから四年目であるが、彼が若き日、日興の最初の弟子となつたといふのは解しかねる。それにしても兩者が師の示寂後、數年にして不知となつたらしいことは推察できるであらう。

日持はまた文才にめぐまれ、書道をもよくしたという。佛祖統記にも「師は文質彬々、ことに書法を得たり。佐渡に侍し、身延に奉じ、高祖の尺牘にして師の手に出ずるもの多きにおる。」とある。日蓮入滅後一年、弘安六年十月に六老僧は池上に集り、師の遺文百四十餘篇を結集して「録内御書」と名づけたが、そのうちにかつて日持が作り、日蓮が見て「われ自らこれを記すとも一字を加うべきなし」と激賞したという「持法華問答鈔」が加えられた。馬田行啓氏の説によると「録外御書」に收められた「聖愚問答鈔」もまた日持が著作し、日蓮の印可を得たものだとのことである。(三三三)しかし通行本にはこれは文永二年作としてあるので、日持がはじめて松葉谷に赴いた文永七年より前にあたるわけであるが、専門家の高教を仰ぎたいと思う。

「しようがいいくばくならず。思へば一夜のかりのやどりを忘れていくばくの名利をかえん。又えたりとも是れ夢の中のさかへ、めずらしからぬたのしみなり。但先世せんぜの業因に任せて足りぬなるべし。世間の無常をさとらん事は目にさへぎり耳にみてり。雲とやなり雨とやなりけん。昔の人は但名をのみ聞ゆきこ。露とやきへ煙とや登りけん。今の友も又みえず。我れいつまでか三笠の山の雲と思ふべき。春の花の風に隨ひ、秋の紅葉の時雨に染る。是皆ながらへぬ世の中の

ためしなれば、法華經には「世皆不^ル牢固^ト如^シ水沫泡煙^ト」とすすめたり。……」とは持妙法華問答鈔の一節である。これほどの文章をものしえたとすれば日持その人の才分のゆたかなことは十分に察しうるであろう。^(二四)

二、その門出について

永仁二年（一二九四）は元の世祖クビライの歿した年であり、日蓮の十三回忌に當っていた。日持はひと月早く九月十三日に松野で大法會を修め、十月十三日の命日には身延山に赴いて祖塔を拜し、翌永仁三年正月朔日に僧俗の人々に法話を行ったのち、後事を高弟日教らにゆだね、ただひとり錫杖を手に山門を出ていったという。佛祖統記には「門人これに随わんとするに、師のいわく『われ異國を救濟せんとする。身命を佛祖に奉ず。よし江魚の腹中に葬らるとも、われ何ぞこれを辭さんや。なんじの堪うるところには非ず。若し一毫の浮心にわたっては、わが願は成らず』と。衣を振って去る。門人泣いて別る。遂に異域に趣いて終る處を知らず。是故に法孫今にいたって正月朔日をこれが忌日となし、もって齋會を修むるなり」とある。

宣化における日持の墓と考えられるものから出た遺物については後文に詳しく述べるつもりであるが、その中の文書一枚にこの門出の朝したため、笈に納めて出たと思われるものがある。（第一圖参照）

中央に「南無妙法蓮華經」と七字の題目をしるし、その右下に「永仁乙未元旦題於蓮永書房」と、また題目の左方に、

更鼓一響新乙未 今朝發足出庵門

一天四海唯深義 歸妙法傳孤錫魂

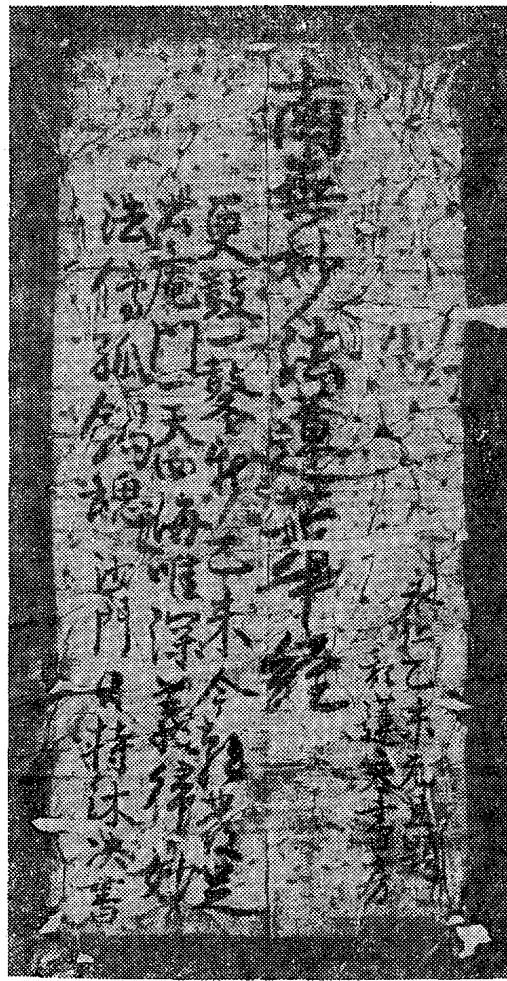
日持上人の大陸渡航について（上）（前嶋信次）

（三七七）

一三

沙門日持沐決書

第一圖 (宣化副葬文書第三の表)



一切衆生にすすめたる人、一人もなし。此の徳はたれか一天に眼まなこを合せ四海に肩をならぶべきや」「禪宗は三衣一鉢ねの大慢の比丘の四海に充滿して、一天の明導とをもへり」「此の五十年が間一天四海一人もなく法然が弟子となる」などと書いてある。また同じく「法華取要鈔」には「一天四海一同に妙法蓮華經の廣宣流布せんこと疑ひ無からん者か」とある。この場合の一天四海をルノンドー氏の如く「日本國」の義に解するのは如何である。大體は「全世界」の意とと二二五ってよいかと思われる。深義は同じ日蓮の「二乗作佛事」中に「爾前の經は深經シなればと云つて淺經の意をば顯わさず。

としてある。時を告げる夜の太鼓がとうとうとなりわたれば、新しい乙未の歳（永仁三年—一二九五）となった。この朝を草鞋ふみしめ門出ししようとする。何のために……？ 次の二句はこの雄圖を決行するに至らしめた彼の抱負を吐露したものと見てよいであろう。「一天四海唯深義ゆいじんぎ」の一天四海については日蓮の「撰時鈔」に唐の太宗のことをのべて「賢主なり。當時名を一天そのかみにひびかすのみならず、三皇にもこえ五帝にも勝れたるよし四海にひびき……」といい「南無妙法蓮華經と

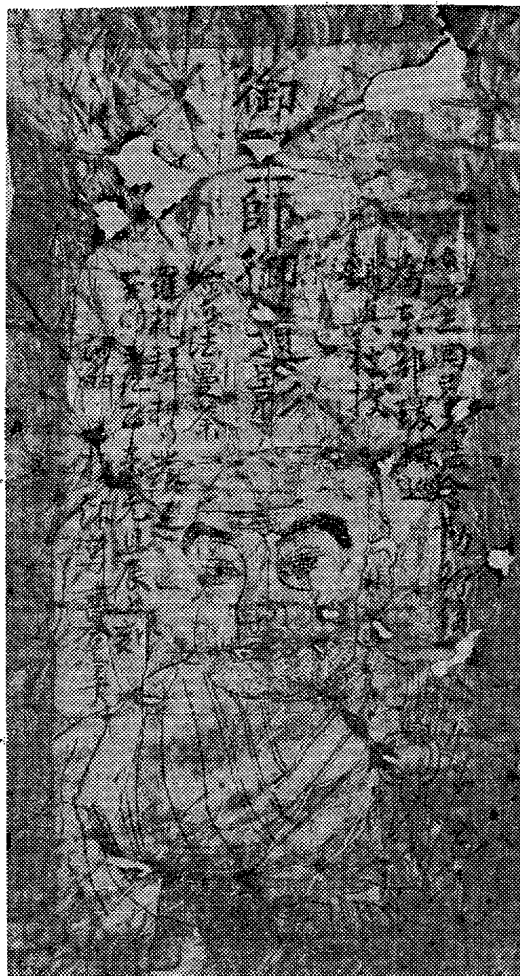
淺經なればと云つて又深義を含まざるにもあらず。法華經の意は一一の文字は皆爾前經の意を顯し、法華經の意をも顯す故に、一字を讀めば一切經を讀むなり。」などという風に用いた例も見える。最後の一句「歸妙法傳孤錫魂」は淺學のわたくしにとつては難解であるが「妙法に歸しこれを錫杖をひきつつひとり異域に赴いて傳えんとするわが眞心よ」の意に解してはどうであらうか。つまり「一天四海をみな妙法に歸せしめんとすの恩師の遺志を奉じ、われは身を惜まざらばひとり今朝ぞ旅立つ」という述懐の詩と解したい。佛祖統記に日持の心境をのべ「本朝の弘經には（日）昭・（日）朗等の諸哥ありて足れり。我は異域に往つて妙法を闡揚せん。たとい海中に颶風大魚の難に遭うとも、これわが志願なり」として故國を去つたとしてある。また影山堯雄師は、海外弘法はもともと日蓮聖人の宿願であつたとし「南無妙法蓮華經の七字を日本國にひろめ、震旦、高麗までも及ぶべきよしの大願をはらみて……」（別當御房御返事）「日本乃至漢土、月支、一閻浮提に人ごとくに有知無智をきはらず、一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱うべし」（報恩鈔）「月は西より出でて東を照し、日は東より出でて西を照す。佛法も亦以て是の如し。正像には西より東に向ひ、末法には東より西に往く」（顯佛未來記）「日は東より出でて西へ入る。日本の佛法の月氏へかへるべき瑞相なり。……各々我が弟子等はげませ給へ、はげませ給へ」（諫曉八幡鈔）などある諸例をあげ、最後に日持は師のこの宿願を果し全世界の人類を救濟せんために旅立つたのだと論じられた。^{二六〇}宣化出土の前掲の文書は確かにこのような説を裏書きしてゐると思われる。

松野の蓮永寺を門出したのは、大體午前八時すぎころらしい。その理由は、同じく宣化文書の他の一枚に日蓮上人の像をえがき（第二圖参照）その上に次のような書き入れがあるからである。

日持上人の大陸渡航について（上）（前嶋信次）

（三七九） 一五

第二圖 (宣化副葬文書第二の表)



永仁二年の秋、高祖の十三回忌大法會を行ったのち「東部環球」の巡錫にいでたたとし、かって師より授け給わりし御法の曼荼羅とともに、この御像をも禮拜し、二つながら携えて發足する。時に永仁三年元旦、辰の上刻(午前八時―九時)であるというのである。傳うるところによれば日蓮の彫像は弘長元―三年の間(その四十一―四十二歳)伊東に流刑されていた間に、高弟日朗が鎌倉において、或日由比方濱で流木をひろい、手づから師の像を刻してこれに奉仕したのが最初のもので、現在

御聖師御遺影

御十三回忌大法會勤行後

爲東部環球巡

錫與被授

給御法曼荼

羅禮拜携發足

是時永仁乙未元旦辰上刻

沙門日持沐寫書合掌

池上本門寺祖師堂の木像



堀の内の妙法寺にあるという。^(二七) また有名な池上本門寺祖師堂の木像については、大正十四年にその胎内から御遺骨を納めた経筒が発見された。その筒には、

弘安五年 壬午 十月十三日 巳刻 御遷化

大別當 太國阿闍梨 日朗

大施主散位 大仲臣宗仲

大施主 清原氏女

という刻字がある由である。この木像は等身大で、その臺座の底に肉筆の署名があり、

敬白 侍従公日淨 花押

大願主二人 蓮華阿闍梨日持 花押

正應元年六月八日

としてあり、更に像の頸すじの内側に

南無日蓮大師 日行

南無多寶如來

南無妙法蓮華經 日持 花押

南無釋迦牟尼佛 日淨

日妙

日持上人の大陸渡航について (上) (前嶋信次)

と墨書してあるとのことである。^(二八)

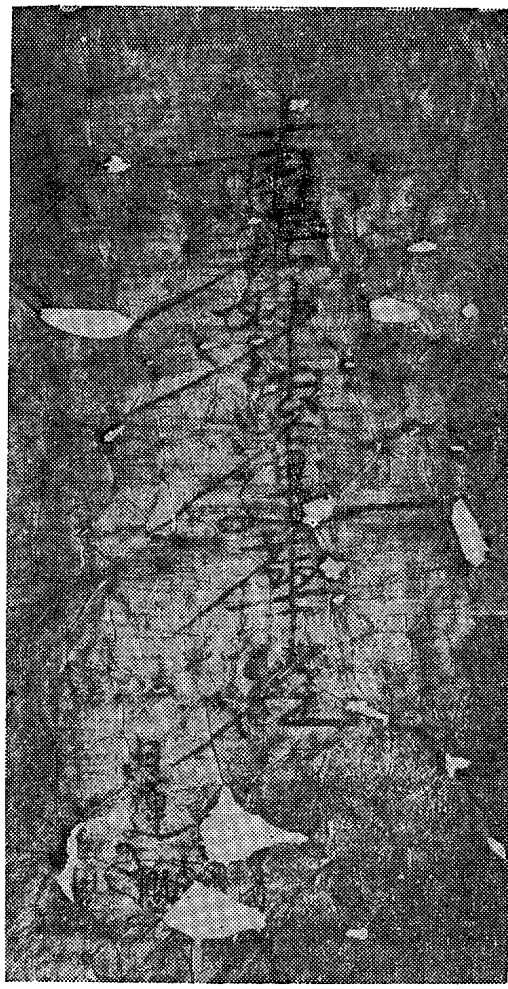
また日蓮が佐渡の配所から鎌倉にもどる途中、信濃國吉田という山里で芝田右近の家に宿泊されたが、この一家はあげて聖人に歸依し、ことに右近の子は後に和泉阿闍梨日法という高僧となり、中老僧の一人に加えられた。この人はまた佛像の彫刻に妙を得、その作になる木像が現在北山の本門寺にあるとのことである。^(二九)「元祖化導記」に聖人の遺骨が身延に移されたとき「同十月二十九日、御八木を取り、御影像を建立之あり。作者は御弟子日法、七々日御佛事御入堂之あり云々」とあるごとく、示寂後、間もなく刻され、もとは身延に安置されていたのであるが、日興上人が身延を出る際、富士郡に移したものと所傳がある由である。^(三〇)また聖人が佐渡の一の谷の配所にあつたとき領主近藤次郎清久の子がはやく歸依して法弟子となり學乘坊日靜^{じよつ}となえていた。文永十一年、聖人が佐渡を去ろうとされたとき、日靜は別離の悲しみにたえず、佛工伊勢小太郎に大士の像を彫刻せしめて開眼を請うた。これが後世鏡の尊像とよぶものとのことである。^(三一)その他下總中村の日本寺にはこれまた大士在世中富木^{トキ}入道の作という「交互^{たがひ}の御影」という木像があり、玉澤の妙法華寺には弘安五年身延にて日昭上人が自ら刀をとつて刻したという所傳の木像があるよし。^(三二)畫像としては弘安四年波木井實長が藤原親安をして尊容を寫さしめたという「波木井の御影」(ただし原畫は傳わらず) 下總中山淨光院の「水鏡の御影」その他「身延奥の院御影」「京都要法寺の御影」「玉澤妙法華寺御影」「池上本門寺御影」「大野本遠寺御影」など由緒の尊さを誇るものがいくつつかあるようである。^(三三)

今これらの彫像や畫像の寫眞を一卷にまとめた星野武男氏の著書によって、宣化文書の日蓮像と比較して見ると、何よりもまず池上本門寺の木像と酷似していることが一目で瞭然とする。太い眉の形、兩眼の角度、口もとから、全般の

輪畫に至るまで、全く同じであることは感歎の外ない。木像は日持上人等が師の七回忌にあたってつくらせたものであることは確證があるし、畫像は前述の如くその十三回忌をすませた後、御賜の曼荼羅とともに携えて山海萬里の旅に出たものと思われる。この二つの肖像が形影相映するが如くであることは、木像も畫像もふたつながら日蓮の眞の風貌をよく傳えている證據であるとともに、その由緒の正しさを自ら物語るものであろう。

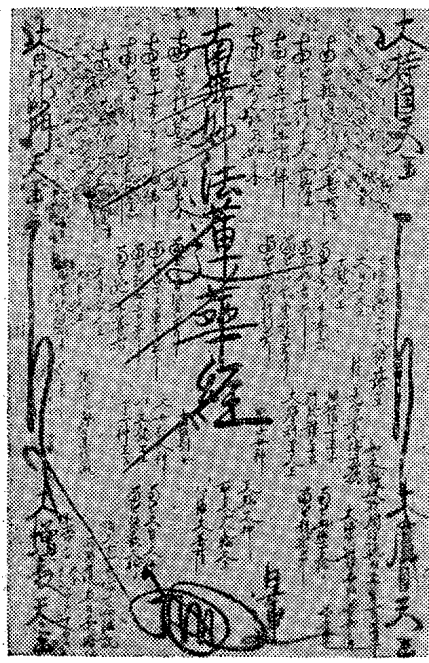
次に、この肖像畫とともに携え出た御法曼荼羅の方はどうなったであろうか。それもまた前記の文書と共に宣化の墓から發見されている。(第三圖参照)日蓮の眞蹟はその生存年代の古さのわりにしては多數のものが今に保存され、その筆になる遺文の所在の知られたものが百五十餘篇に達するといわれ、^(三四)寫眞版による「御眞蹟帖」も數種出版されている。^(三五)

第三圖 宣化副葬文書第一ノ表



日持上人の大陸渡航について(上) (前嶋信次)

弘安四年五月十五日の日附と「衛護大日本國」の書き入れのある曼荼羅。



(三八三) 一九

いま試みに宣化出土の日蓮と署名し花押をおした七字の御題目と、弘安四年五月十五日に聖人が「諸天晝夜、法の爲の故に大日本國を衛護す」と左下に書き入れた御曼荼羅とをならべて見ることにする。^(三六)(第三圖參照)私は宣化出土のこれもまさしく日蓮の眞蹟であり、日持が奉持して去ったそのものとしてよいと思うのであるが、大方の御批判を仰ぎたい。御題目の筆法も年代によつて若干の變化があるようであるが、弘安四年のものと、宣化出土のものとは殆ど變化がないところから見て、後者もまた日蓮がその晩年、身延において日持にあたえたものではないかと想像される。

三 大地を球形と知りしか

第二圖の日蓮の肖像畫の上に書きそえた文章中に「東部環球巡錫」という珍らしい一句がある。環球といへば、いまでもなく、この大地が球形をなしていたことを知っていたことになるが、鎌倉時代にすでにこのような知識がわが國人の間に傳わっていたのであろうか。マガリヤエンス(マゼラン)の船隊がはじめて世界一周をとげてそのことを實證したのは一五二二年であるが、これはそれよりも二百數十年も前にあたってゐる。當時のわが國の文献に「環球」というような言葉は外にも果して現われているのであろうか。甚だ疑問である。

しかし大地が球形をなしているという知識はたしかにそのころアラブ地理學の東方傳來によつて少くとも中國には達していた。元史(卷四八)天文志によると世祖フビライの至元四年(一二六七)に扎馬魯丁(Jamal ad-din)が「西域の儀象」數種を造つたとのことであるが、そのうちに左の二種もあった。

一、苦來亦撒麻

二、苦來亦阿兒子

第一は Kurai sama (ペルシャ語で天球の義) の音譯にちがいない。元史には「渾天圖なり。その制、銅を以つて丸と爲し云々」と説明してあるが、恐らく天球儀にあたるものと思われる。第二は Kurai arz (大地の球の義のペルシャ語) で現在も地球儀のことをそう呼んでいる (アラビア語の kurat arziya)。元史にはこれを説明して「漢言地理志なり。其制、木を以つて圓毬をつくる。七分は水と爲し、その色は綠。三分は土地となし、その色は白し。江河湖海を畫き、脈絡その中を貫串す。畫して小方井を作り、以つて幅圓の廣袤、道里の遠近を計る」としている。中國の王庸氏はこの箇條を見て、

「この説明に由るに地球儀たるの疑なきを知る。ただし、その時新大陸なおいまだ發現(=發見)されず。この地球儀えがくところの地域いかんぞや、實に一つの頗る趣味あるの問題となす。顧るに當時にあっては地學知識の影響は恐らく甚だ狹小なり。その内容もまた從つて考へ見るなし。明のすえ利瑪竇(マテオ・リッチ)の世界地圖出ずるにおよんで、しかるのち地球と近代世界地圖との知識の、はじめて一般士大夫の注意する所となるのみ」と云っている。^(三八)なるほどコロンブスの新大陸發見よりも約二百三十年も前のことではあるが、大地が球形をなしていることは、イスラム地理學者はとうに氣づいていて、このような地球儀をも製作していたのである。

これを中國に傳えた扎馬魯丁はその名前から見てもイスラム教徒であることは疑うべくもないが、その出生地などについて若干の記録が辿れるように思う。イール汗國の有名な史家ラシード・ディーン Rashid ad-din (一二四七—一三二八) の集史 Jāmi'ut-Tawārikh によれば、モンゴル王朝の大汗マング(モンカ)憲宗、在位一二五一—一二五

九)は「モンゴル族のすべての帝王中、その才能、氣魄、慎重さ、機轉、聰明さ、鋭敏さにおいて頭角をぬきんでいた。その教養の深さはユークリッドの多くの圖式を解釋したほどであった。賢明な素質、高い天賦の才に導かれたこの人は、その尊い治世のもとに觀天臺(天文臺)が建てられることを望み、その配慮をブハーラーのひとジャマルツ・ディーン・ムハンマド・ビン・ターヒル・ビン・ムハンマド・ザイディー Jamāl ad-din Muḥammad bin Tāhir bin Muḥammad az-Zaidi Bukhārī にゆだねた。しかしこれに必要な工事の一部分が乗り越えることの出來ぬ障害となつた」とある。^(三九)このジャマルツ・ディーンと元史の扎馬魯丁とは恐らく同一人であろう。そうするとこれは中央アジアのブハーラー出身の學者だったのであり、「ザイディー」とあるところから、イスラム教シーア派中のザイド宗派の人だつたと想像される。恐らくイラン系の人だつたであろう。クビライに重要された賽典赤(Sayyid Ajall)などもやはりブハーラーの出身者であつたから、^(四〇)同郷人として交渉があつたことも考えられる。

當時のモンゴル帝國の都カラコルムには、このジャマルツ・ディーンのほか、相當多數のイスラム教徒が居つたらしいから、それらを通じて西アジアの事情はよくマング汗にも通じていたであろう。エルブルズ山中のアラムートの險に據り、狂信的な暗殺團を擁して回教諸國人の恐怖の的となつていたイスマール教徒(ムラーヒダ)のもとに、やむを得ずひきとめられていた當代切つての數學・天文學などの大家ナスィールツ・ディーン・トゥースィー Khwāja Nasir ad-din Tūsī の名聲もまた大汗の耳に達していた。同じくラシードツ・ディーンの集史によると一二五三年十月に、弟フラグを西方遠征の途につかせる際のこととして「かれ(マング)がその弟に別れをつげた際、イスマール教徒に從っている諸城砦の征服をとげた曉には、ホージャ・ナスィールツ・ディーンを宮廷に送りよこすようと頼んだ。

しかし、これらの征服が實行されたころ、マング汗はマンジ（蠻子、南宋をさす）の征服に従い、都から遠く離れていたので、フラグはナスィールッ・ディーンにペルシャのうちに天文臺を建てるよう命じた。何故かというにこの君は、この名士の非難の餘地のない所行と誠實の徳を知っていたところから、これを自分自身のそばに置きたかつたからであつた。フラグが王位についてから（筆者註、一二五六年）七年目にイール汗の天文臺がマラーガの郊外に建てられた。設計はムアイアドッ・ディーン・アラジ、フアフルッ・ディーン・マラーギー、フアフルッ・ディーン・アフラーティ、ナジユムッ・ディーン・ダンラーン・カズウィーニーという四人のすぐれた學者と協議して定めたものであつた」としてある。^(四一)もともとフラグは、この天文臺の建設をナスィールッ・ディーンに一任し、どこなりと適當な地を定めるように命じたので、後者はマラーガの町を選んだともある。^(四二)話はやや前にもどるが、フラグ汗がアラムートを攻略し、イスマーイール教主ルクヌッ・ディーンらがその軍門に降つたのは一二五六年十一月であつたが、このときナスィールッ・ディーンはハマダーン出身の名醫ムワッフィックッ・ダウラやライスッ・ダウラの一族とともに出で降つた。^(四三)ド・ソンのによるとこれらはイスマーイール教主にはじめから全面的降服を勧めてやまなかつた人たちだつたという。^(四四)フラグは兄マングの命をうけていたので、イスマーイール教徒をば教主はじめ「搖りかごの中の幼兒に至るまで悉く殺し、その數は一萬二千に達した」とある。^(四五)しかし、ナスィールッ・ディーンはもちろん大切に保護され、一二五八年のバグダード攻略のときもフラグの陣營にあって相談にあづかつたことが記録に見えている。この碩學をカラコルムの都に送りどけなかつた理由は、ラシードッ・ディーンの云う如く、大汗マングが南征して留守であつたせいであるが、佛國のブローシエは、その留守を預つたアリク・ブカが學問に理解がないため、一代の大學者を疎畧にあつたといはしな

いかと氣遣つたためもあつたと云つて^(四五)いる。マラーガの天文臺とかなり深い關係のあつたのはシリアの醫學者・歴史家バルヘブライウス Barhebraeus (ユーハンナー・アブール・ファラジ・イブヌル・イブリー Yuhanna Abū'l-Faraj ibn-al-Ibri) である。この人は一二二六年にマラティア Malatia に生れ、ヤコブ教會の大主教となつて活動し一二八九年七月にマラーガで歿している。シリア語で大部の世界史を書き、またそれをやや要略したものをアラビア語でも書いて^(四七)いるが、その在生中のこと(一二八六年)にまで及んでいるので、モンゴル史研究家にも尊重され、ドートソンもその蒙古史の重要な参考書の中にあげている(アラビア語のものは Kitāb mukhtasar ad-duwal 諸王朝略史)。多分この書を引いたと思われるヒッティ氏の説によれば、フラグがマラーガの天文臺の建設にとりかかったのは、バグダード陥落の翌年(一二五九)からであり、それに近接して四十萬卷を藏する圖書館をも建てたが、これら文献の多くはモンゴル軍がシリア、イラク、ペルシャの各地から掠奪して來たものだった^(四六)という。またバルヘブライウスは一二六八年には、この天文臺(或は圖書館)でユークリッドの幾何學を講じ、一二七二―三年にはプトレマイオスの學説を講じた^(四七)たのである。大汗マングがカラコルムの都でユークリッドを研究したなどということも、それが早くからイスラム社會に傳わつていた所から見て恐らくその地にいたイスラム學者から教えられたものである。バルヘブライウスによれば、マラーガ天文臺の設備は人々の驚歎するところで、渾天儀(armillary sphere)、象限儀(mural quadrant)、冬至夏至の觀測臺(solstitial armil)などがあつた^(四八)たのであるし、ナスィールッ・ディーンはこの天文臺長として、有名な「イール汗の天文表」az-zij al-ī-khānī を完成してフラグ汗に献げたが、これは全アジアでもはやされ、中國にまで傳わつた^(四八)という。元史本紀(卷七)に世祖クビライの至元八年(一二七一)七月「回回司天臺の官屬を設け

ジャマルツディーン
札馬刺丁を以つて提點となす」とあり、それから後も處々に回々司天臺のことが見える。これは恐らくマラーガの天文臺の制度にならつたものと思われる。佛國のブローシエは至元十六年（一二七九）にクビライの命で今の北京の地に觀星臺が建てられたのはマング汗の遺志をついだものであるが、これは「回回司天臺」のことを指して云つていたので、その年代は何かの誤解であらう。その初代の臺長となつた札馬刺丁は、ラシードツ・ディーンがマングにつかえたといつてゐるブハーラー出身のジャマルツ・ディーンであり、元史天文志に地球儀はじめ種々の儀象をつくつたという札馬魯丁と同一人物かと思われる。元史（卷九十）百官志には「回回司天臺」の陣容が細かにしるしてある。「回回司天監は秩正四品、觀象衍曆を掌る。提點一員、司天監三員、少監二員、監丞二員、品秩上に同じ。知事一員、令史二員、通事兼知印一人、奏差一人、屬官教授一員、天文科管勾一員、算曆科管勾一員、三式科管勾一員、測驗科管勾一員、漏刻科管勾一員、陰陽人一十八人。世祖、潛邸にありし時、旨有り、回回の星學を爲すもの札馬刺丁等を徵し、其の藝を以つて進めしむ。未だ官署あらず。至元八年はじめて司天臺を置く。秩從五品。十七年行監を置く。皇慶元年改めて監となす。秩正四品。延祐元年正三品に陞ぼし司天監を置く。二年、秘書卿に命じ提調監事せしむ。四年正四品に復す」とある。つまり回回司天台が正式におかれたのは至元八年からであつたが、ジャマルツ・ディーンが世祖に召されたのはその即位する前のことだったのである。

モンゴルの帝室でトルイの子達のうち、クビライとフラグとが特に親密であつたことはよく知られてゐる。クビライが元朝を建て中國に君臨し、フラグが西アジアの大部分をとつてイール汗國を創めた後も、この兩國の關係は密接し、二人の後繼者たちの時代になつても、相互の往來は比較的繁く行われていた。それで至元四年（一二六七）に札馬魯丁

がつくつた西域の儀象も、恐らくその範を、ナスイールツ・ディーン・トゥースイールらのマラーガの天文臺のそれにとつたものと考えるのが自然であろう。マラーガの天文臺におかれたもろもろの儀象については、佛人シュールダンの研究がある由であるが (M. Jourdain, Mémoires sur l'observatoire de Meragah et sur quelques instruments employés pour y observer, Paris 1810) 今これを見ることが出来ず、何よりもバルヘブライウスの史書の原典を見たいが、これも目下見あたらぬのを遺憾とする。元史天文志には、前掲のものの外に、

一、咱禿哈刺吉^(五〇) (漢言混天儀也。其制以銅爲之云々)

二、咱禿朔八臺 (漢言測驗周天星曜之器也云々)

三、魯哈麻亦渺凹只 (漢言春秋分晷影堂云々)

四、魯哈麻亦木思塔 (漢言冬夏至晷影堂云々)

五、兀速都兒刺^(五一)不定 (漢言晝夜時刻之器也云々)

などを扎馬魯丁がつくつたとある。マラーガ天文臺に備えたものが明かとなれば、これらの観測儀のこともまた一層明かとなるであろうし、元史天文志の説明文は、ひいてマラーガ天文臺の観測儀を研究する資料となるかも知れない。

マラーガの天文臺におそらく *kurai arz* とよばれる地球儀があったものと推察される。ただそれをはっきり示した資料を現在のところでは探し出せないものであるが、少し時代が下って中亞の英雄ティームール (タメルラン) の孫にあたるウルグ・ベク *Ulug-bek* (1394—1448) もよく知られた如く一流の天文學者であつた。一四〇九年にトランスオクシアナの太守となり、サマルカンドに大規模な天文臺をつくつて斯界に偉大な貢献をしている。同じくティ

ムール朝の歴史家カマル・ディーン・アブドル・ラザク Kamāl ad-dīn Abū ar-Razzak as-Samarqandī はその著書 (Matla as-Sadain) のうちで、この天文臺のことをかなり詳しく述べているが、その中にスルターンはほこらかに天空にそびえたつこの建物の中に九天を現わす見るも楽しいほど見事な細工になる圓球や、天體圖や、地球儀 (hayāt kurat arz) や詳細な氣候帶圖などを、或は備えつけ、或はえがかしめたとして^(五二)いる。これによつてウルーグ・ベクの天文臺にも地球儀のあったことが明かである。

大地が球形をなしていることを、はっきりと説明しているアラブ地理學者としてはシリアのアブール・フィダ^{Abū'l-Fida'} は代表的なものであろう。かれはアイユーブ朝の一族で一二七三年にダマスクスで生れ、ハマールの領主となり、一三三一年にその地で世を去った。その地理書は、廣く先人の業績を集大成したもので、同じ人の世界史とも名高いものであるが、名づけて Tagwīm al-buldān (諸國の評價の義) という。その序説のはじめに、

「大地は一口に^{アルツ}云えば圓球の形をしている。このことは天文學では、多くの方法で證明することが出来る。たとえば、星は、東方の民にとっては、西方の民にとってよりも、一ときわ早く上りかつ沈むが、これは大地が東から西へとまををなしていることを示している。(中畧)このことを解りやすくするひとつの問題を示そう。この大地を一周する可能性のあることを考えて見ようではないか。更にまたある地點に三人の人間が集つたと假定しよう。その一人は西方に向い、もう一人は東方に向つて進み、最後のものは、もとの場所にとどまつて、他の二人が地球を一周するのを待つてゐることとする。西に向つて進んだものは東から歸つて來るだらうし、東に進んだものは西から歸つて來るであらう。ところで、西に向つて行くものは、一日をなくすことになるだらうし、東へ向つて行くものは一日餘計に數えることになる

ろう。つまり、西に向って進んだものが、假に七日間で地球を一周したとすると、太陽と同方向に進んだのであるから、その人にとって太陽はその廻轉の七分の一だけおそく沈むわけである。それで七日間に一廻轉分、つまりまる一日なくしたことになる。その反對に、東方に進んだものは、太陽と反對の方向に行ったのだから、その人にとって太陽は一日の七分の一だけ早く沈んだことになり、七日後にはまる一日となつて、それだけ餘計にかぞえたこととなる。かくて出發の日を金曜とし、二人とも次の金曜日に動かずにいた者のところへ歸ってくるすると、動かなかつたものは今日は金曜日だとするであろうが、西に向つて進んで東から歸ってきたものは今日は木曜日だとし、東に向つて進み西から歸ってきたものは、今日は土曜日というであろう。地球一周の旅が數日のかわりに、數カ月か數年間續いたとしてもその結果は同じことであらう。」とのべている。

また世祖のとき扎馬魯丁がつくつた地球儀の七分は水、三分が土地であつたと元史にあるが、これももちろんアラブ地理學の知識で、アブル・フィダーは前文にひきつづいて、

「赤道とは春分と秋分との二點（の中間）を通過すると假定した大圓周で、大地を北半と南半との二つにわかつものである。次に兩極を通過するもう一つの大圓周をえがいたと假定すると地球はこの二圓周によつて四部にわかたれるであろう。人間の住む世界をなしているのは北方に位するこの四分の一なので、他の三部分についてはわれわれの知るところではない。最も廣く行われる意見ではこれらはみな水に蔽われていることになつてゐる」と述べている。^(五三)全體の二・五分が陸、七・五分が海というのであるから、大體、扎馬魯丁の地球儀と合うようである。

それではイスラム世界ではいつころから大地を球形とし、その形を模したものを作りはじめたか。これについて問題

となるのはシチリアのノルマン王朝のロジェール二世のものとで活動したイスパニア・アラブ系の大地理學者イドリースィー *Abū 'Abdullāh Muḥammad b. Muḥammad al-Idrisi* (1099—1166) である。モロッコのセウタに生れ、シチリアのパレルモで、一一五四年ころ不朽の大作たる「ルジェールの書」*Kitāb Ruġer* (つまり *Nuzhat al-Mush-tāq fi Ikhtirāq al-Āfāq* (世界周遊を希望するもの) の樂しみ) を完成した。これには七十一枚の地圖を添えてあったが、その本文中で、やはり大地の球形であることを説いたともいう。^(五四) この大著のほか、かれは銀製の天體儀と、同じく銀製の大地の模型を作つてロジェール王に献じたことでも有名である。

しかし、この大地の模型は圓盤状のものであったという説が有力になつてゐる。前述の地理書の序文中でイドリースィーは、その準備に約十五カ年のたゆまぬ努力をほらつたことを述べ、十分な資料が集つたところで、鐵のコンパスをつかつて精密な下圖をつくり、次に混雜物のない純銀をとかつて四百五十ローマン・ポンドも重さのある巨大なダイーラ *da'irah* をつくらせ、これに七氣候帯の區分、國國、海岸、大洋、入海、河川、沙漠、耕地その他一切を刻せしめた。そしてこのダイーラの説明書として一巻の地理書を編めたのが即ちこの書であると述べてゐる。このダイーラという言葉をドイツの東洋學者トルンベルク等は「圓球」と解しているし、そういう意味も確かにある。しかしフランスのジョーベール *Jaubert* はイドリースィーの地理書の譯本中でこれを「圓」または「圓盤」と解し、レーノーもそれが正しいとしてゐる。^(五五) ヒッテイは、イドリースィーは大地の球形なことを知つてはいたが、銀でつくつたのは圓盤形の世界地圖(a disk-shaped map of the world in silver) だつたと考へてゐる。^(五六) この問題を決定することは、すでにその實物が滅んだ今では困難であるが、一二六八年前にすでに中國まで地球儀の製法が傳つたとすれば、イスラム學界

でこれが作られたのは、かなりそれより早い時代からであったとしなければならぬ。一一五四年にイドリースィーが作ったものも、或は球形のものであったかも知れぬ。ジョーベルやレーノーの如き權威者が圓盤と解したため、この方が一般に受入れられてしまったのであるが、「グーイラ」という言葉に兩様の意味があるのであるから、トルンベルク等の如く「球」と解する方が或は正しいかも知れないとわたしは疑っている。

それにしても日持上人が永仁三年正月元日の門出の朝「東部環球」という言葉を使っているのは誠に珍らしく、ジャマール・ディーンが中國で地球儀をつくつてから二十九年後のことである。しかし、當時大陸の新知識を最も早く最も豊かに輸入しつゝあつたのはわが佛教界であったことを考えると、これはまた當然のこととも思われるのである。池上本門寺の日蓮像は前文の如く日蓮寂後七年目（正應元年）に日持と日淨とが願主になって造つたものであるが、この侍従公日淨はもと最蓮坊といひ京都の人で天台の學匠であったが、罪有つて佐渡に流され、はからず塚原の配所で日蓮に會ひ、その門下に入ったものといふ。^(五七)日持ともまた佐渡以來の同門の友なのである。比叡山延曆寺は當時、最も速かに大陸の知識が傳わる中心であつたろうから日淨などを通じて大陸の新知識を得たことも想像される。日蓮にしても、日持にしても、また日昭や淮長老となつた日行にしても、みなはじめは叡山に學んだ人々である。後に立場を異にしても天台とは深い縁があるのであるから、何かと接觸があつたことと思われる。いずれにしても大地球形の新知識が當時のわが國の少くとも限られた範圍の人々には傳わつていたものとして少しも不思議はないと思われる。

四、宣化と立化寺

前文にしばしば「宣化文書」とか「宣化出土の遺物」といったが、おくれればせながらここにその発見の事情を述べなくてはならぬであろう。

第二次世界大戦末まで続いた北京王府井の山本寫眞館は明治三十年ころ山本讚七郎氏(五八)の創立で、山本氏が歸國したあと岩田秀則氏が二代目の經營者となり終戦後の閉鎖のときに及んだ。昭和十一年正月、中村某が東安市場で銹びついた鍍銀の盒を見つけ、買いつけて岩田氏のもとに持参した。直徑十センチほどのあまり見ばえのしないものだったが、よほど時代のついたものらしかったので岩田翁はこれを譲りうけた。同氏の古物蒐集に熱心だったことが偶然この品を入手する機縁をつくったわけである。この盒の表にも裏にも何か刻文があったが、入手當時はよごれていて判讀し難かった。ふき清めて見ると、第四圖の如くで、

爲_レ祝_ニ八壽八紀老_一

敬贈日持師

大徳甲辰年二月十日 鄭日昌敬上

と凹刻してあり、優美な鳳凰の模様もついていた。また裏面には樹木の左右に天女と孔雀の模様を配しその下に「王吉作」と刻してあつた。はじめはこれが合わせぶたになつてゐることも氣づかぬほどに、さして重く考へなかつたけれども、段々に興味をおぼえてきて、こじ開けて見ると驚いたことに、中から丁寧に折り重ねた褐色の文書が三枚出て

きた。いずれも縦二八・五センチ、幅十五センチほどの薄いものだが、茶褐毛の精巧ななめし革で、その中央部に紙を

第四圖 宣化出土の鍍銀盒と印籠

表



裏



はったものであることがわかった。

これが私が前文で宣化文書と呼んだもので、その第一枚の表はすでに述べたごとく、日蓮聖人の署名と花押のある七字の御題目であって、その裏面には次のような書き入れがあった。

御聖師御在世時御下落之

御題目無表装而也年経而

怕破損幸於上谷宣花麝香

鹿皮得售○作表装矣

日持念記 花押

日蓮聖師が御在世中に御下落の御

題目であるが、表装してないので、年を経て破損することを恐れていたが、幸いにここ上谷の宣化の町で、麝香鹿の皮を賣るものがあつたので表装することが出来たというのである（第五圖参照）。第二枚目が前掲の如き日蓮聖人の肖像畫

で、その裏にも澤山の書き入れがあるが、これは後文で述べることにする。第三枚目の表がこれまた既に記した如き日持上人自身の筆になる御題目と、駿河の蓮永寺を出發する際につくったと思われる七言絶句である。その裏面の書き入れについては、やはり後文で考えて見ようと思う。

第五圖

上は宣化文書第一の裏

下は静岡縣松野村の永精寺（ものと蓮永寺）

——昭和三十年十月、大澤一雄氏撮影——



岩田氏は、幽燕の古都で手に入れた古びた盒から、このような日蓮聖人の題目や肖像が出てきたのでいたく驚いた。それで、どうしてこの品が東安市場の骨董商の手に入ったかを調べてみた。この仕事は案外に容易でなかったらしい。しか

しやっと知り得たことは宣化から石炭などを運んでくる駱駝ひきが持って來たことであつた。これら駱駝ひきは、安定門内に宿をとるのが常なので、そこへ人をやったりして賣主を探させたけれども、容易に名乗り出るものはなかったとのことである。（この話は昭和三十年十二月以來、筆者がしばしば岩田氏と會つて、直接聞きえたものである） ようや

くにして岩田氏がつきとめ得た所では宣化城内のとある地點に古塔がある。いつのころかそこで歿したある人の墓所なのであるが、その副葬品を四人ほど持ち出して分配したものの一つであるとの事であった。持ち出されたものは全部で二十八點に達したということもわかった。このような手がかりを得たので、岩田氏は大に關心を深くし、鍍銀の盒のほかの品々をも手に入れようと努めて見た。その結果、まず手に入ったのが、白い眞綿の紐のついた印籠であって、これには龍虎の圖がかかれてあり、すでに磨滅して、判讀に苦しむほどではあるが、その表に漆で「一天四海唯是(?)深義」裏に「爲日持師餞之、於久遠寺日○」などの文字が書き入れてあるのが讀まれた。ついで黒い焼物の香爐、黒漆ぬりの香盒、鳳凰と牡丹とを美しく刺繍した袱紗のようなものなどが手に入った。この袱紗には暗赤色の羅紗の裏がつけてある。これをはがして見るとうちがわに二重の同心圓をえがき、その内部の方に「南無妙法蓮華經」外側の圓内には、

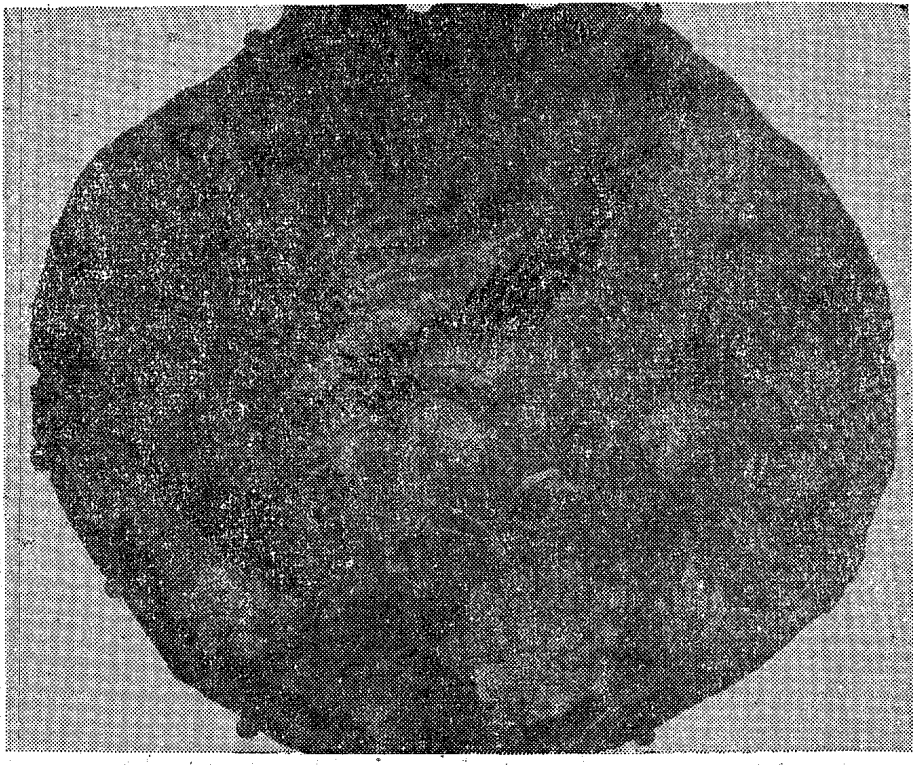
大徳六年壬寅十月吉日

供奉

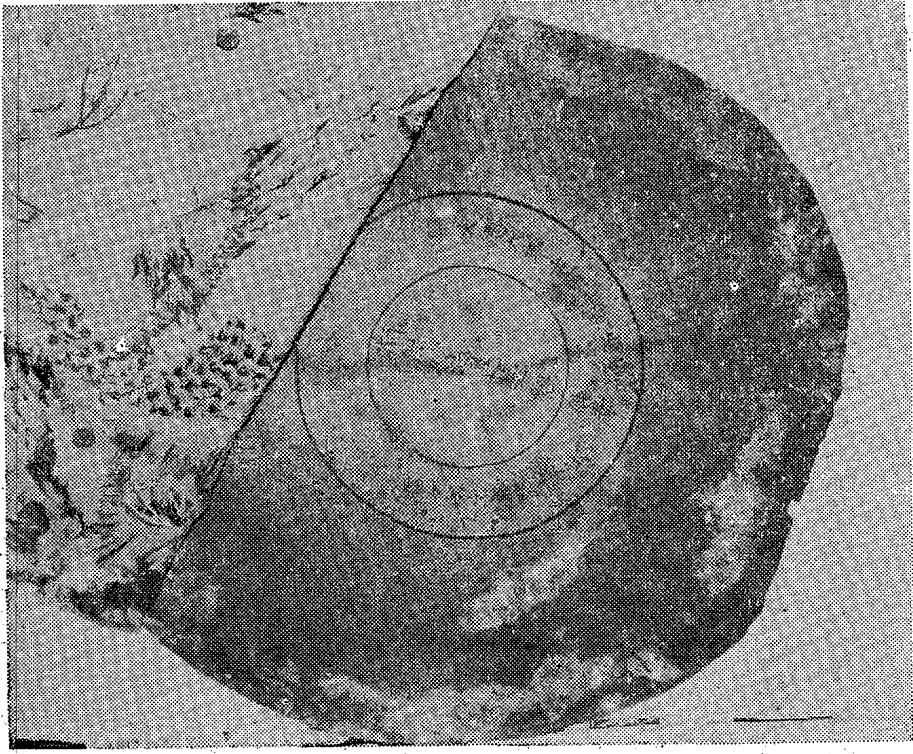
信女弟子余門李氏

と楷書でしるしてあつた(第六圖参照)。更に西夏文の經文、青銅の佛像が一つ、「永仁五年冬刻」と銘した高さ一尺ばかりの日蓮聖人の木像、かなり磨滅した木魚など都合十四點を集めることが出来た。なお、その墓からは古びた僧衣も出たという話であったが、そのような品にはあまり興味をおぼえなかつたので、たつて入手しようともせぬうちに行方不明となつたという。この十四點を集めるのも一朝一夕には出来ず、前後數年間を要したとのことである。昭和十六

第六圖 宣化出土の遺品、絨紗、上は表、下は裏うちの内側



日持上人の大陸渡航について(上) (前嶋信次)



(三九九) 三五

年に至つて、岩田氏は中國人某氏を宣化にやって、これらの品々の出た場所を調べてもらうことにした。その人は宣化市内を約一週間ほど探しあるいたけれども、どうも所在がわからない。斷念して北京にかえろうと思つたとき、たまたまとある古寺の境内で占師（扶亂）^{フワラン}が一心に祈っている姿を見て、うらなってもらふと「城内の西南隅を探して見るがよい」と云つた。宣化城内の西南のすみの塔兒街というところに、廢墟の如く荒れ果てた無住の古寺があり、その境内にこれまた荒廢した一字の塔があつた。附近の者にたずねた結果その塔下の墓穴からいつぞやの品々の現われたこともわかつた。かの寺は立化寺というのであつたが、その故事來歴について詳しいことを知っているものは中々見つからなかつた。ふと高齢の僧侶を見かけて話しかけた結果、やうと次のような所傳をきき出すことが出來た。「昔、ここに高德の僧がひとり住んでいたが、天壽が盡きたと見えて、正坐したまま死んだ。信徒がうちあつまつて遺骸を荼毘にふしたところ、紅蓮の炎につつまれたかと思つたとき、かの高僧はすつくと火中に立ち上つた。人々は驚歎し、誰いうとなく『立化祖師』と呼んでその不思議を語り傳えた。今もこの寺を立化寺というのは、このような因縁からである」と。岩田氏が苦心して蒐めてきた品々は、それでこの立化祖師のものであつたことは疑うべくもなくなつたといふのである。

（岩田氏談）

終戦後、岩田氏はしばらく北京で留用されていたが、やがて歸國することになったとき、何とかしてこれらの品々を持ち歸りたいと思つた。しかし、そのころは荷物検査が嚴重だったので、佛像や木魚などはかの地に殘し、左の九點のみを苦心慘澹のあげく、やうと故國に持ちかへつたとの事である。

一、鍍銀盒

二十四、盒内の文書三通

五、香 爐

六、香 盒

七、西夏文經典

八、袱 紗

九、印 籠 以上

私は昭和三十年九月某日、奥野信太郎教授からこの奇しき因縁話を聞き、右九品の寫眞を示され、深い感動を抑えることが出来なかった。同じ年十二月二十五日に、同じく奥野教授の御配慮で池上徳持町の八木繁雄醫博邸で岩田翁と會見し、これらの遺物を目のあたりに見て、その發見蒐集の苦心談をも聞くことが出来た。それから早くも一年半あまり、この間、日持上人の生地松野村、静岡市の蓮永寺、さらにその足蹟を慕って青森縣と北海道渡島の各地を旅しても見た。この間、松本信廣教授から終始、懇切な奨励と示唆とを受けてきたこと、採訪の旅にはつねに大學院學生大澤一雄君が行を共にし、史料蒐集、復寫、撮影などに協力を惜まれなかったことなどを附記しかつ深謝しなければならぬ。その他にも各地で多数の方々から教を仰いでいる。ただし、この研究には、後に述べる印籠の問題やそのほか、さまざまの未解決の難問題を含んでいるが、これらに對する意見は、すべて筆者の獨斷であるから、責任は悉く自ら負うべきものであることを明かにしておきたい。

(註)

- (一) 日蓮大聖人聖傳 (昭和六年、立正興國團發行) 序文。
- (二) G. Renondeau, La doctrine de Nichiren, (Publications du Musée Guimet) Paris 1953, pp. 6—7.
- (三) 鈴木一成「日蓮上人御自傳」(大正十五年隆文館)のように、遺文中から自傳的部分を抜いて一書としたものもある。
- (四) 國聖日蓮大聖人聖傳の名の下に昭和六年、東京・立正興國團から出版されたものによる。(頁一七五—一七九)
- (五) 昭和二十六年五月、千葉縣市川市、泰福寺發行、非賣品。
- (六) 望月隆策編著「松野村郷土誌」(昭和二十八年三月、松野村郷土誌刊行委員會) 頁一〇五—一〇六。
- (七) 同右、頁一〇六。
- (八) 日蓮上人御遺文 (昭和七年、本化聖典普及會發行) 附録、對告者列傳、頁一五五〇。
- (九) 同家の重縁の親戚深澤壽男氏 (現、山梨日日新聞社業務局長) より筆者への通信による。
- (一〇) 松野村郷土誌、頁一〇七—一〇八。
- (一一) 同右、頁一〇八。
- (一二) 同右。
- (一三) 日本歴史圖會第八輯、頁四三一。
- (一四) 小川泰堂の大士眞實傳 (昭和六年立正興國團活字本) 頁二六六。
- (一五) 同右、頁二八六。
- (一六) 日蓮宗宗學全書第一卷 (大正十年版) 興尊全集、頁九三—九四。
- (一七) 日蓮上人御遺文集附録對告者列傳 (頁一五三—三) 實相寺日源の項に日興を伯耆公、日持を甲斐公とよぶとある。
- (一八) 日蓮上人一代圖會の如き、日蓮の病床を前に法衣の日持が經卷を開いている姿を示している。
- (一九) 興尊全集頁一〇一—一〇二、この六老僧の中で日向が最年少、次が日持であつたらしい。
- (二〇) 同右。頁一〇二。

- (一一) 同右、頁一〇八。
- (一二) 同右、頁一一二。
- (一三) 馬田行啓「日蓮門上の高僧列傳」(昭和十二、大東出版社)頁一二七—
- (一四) 日蓮御遺文集にはこれを「傳日持代作御允可」とし「弘長三年」(一二六三)としているが、その年日持はまだ十四歳にすぎず、もちろん日蓮に師事する以前なので、弘安三年(一二八〇)の誤ではあるまいか。もしそうとすれば日持の數え年三十一歳の作である。
- (一五) G. Renondeau, *La doctrine de Nichiren*, p. 316. なお同氏は法華取要鈔を *Traité sur l'essentiel du Lotus* と題して全譯し、この所を……et, dans le Japon tout entier, ils propageront au large le Sûtra du Lotus de la Loi merveilleuse, cela ne fait aucun doute! としつゝる。
- (一六) 影山堯雄「日持上人傳」(昭和二十六年千葉縣泰福寺)。
- (一七) 小川泰堂「日蓮大士眞實傳」(昭和六年刊活字本)頁一七二。
- (一八) 星野武男「現代人の日蓮聖人傳」(昭和十年、東京・文松堂)頁二一一—三、並びに柴田一能「日蓮聖人全影」(昭和六年、東京)上卷所收。
- (一九) 小川泰堂「大士傳」並に星野武男「日蓮上人傳」頁一四。
- (二〇) 星野氏、同右書。
- (二一) 小川泰堂「大士傳」(昭和六年活字本)頁二七八。
- (二二) 星野氏「日蓮上人傳」頁一五一—一六。
- (二三) 同右、頁三一—九。
- (三四) 同右、頁九九。
- (三五) 例えば神保辨靜編「日蓮聖人御眞蹟」(大正二十三年刊)堀日亨「日蓮大聖人御眞筆寫眞帖」(昭和六年刊)柴田一能「日蓮聖人全影」二卷(昭和六年、同書刊行會)など。

- (三六) 星野武男「日蓮上人傳」頁一三五所掲。
- (三七) Steingass, *Persian-English Dictionary*, Kurat の項。
- (三八) 王庸「中國地理學史」(一九五五年、上海・商務印書館)頁九十。
- (三九) Raschid-Eldin: *Histoire des Mongols de la Perse*, trad. par P. M. Quatremère, Tome I. Paris 1836, p. 325.
- (四〇) Sayyid Ajall Shams ad-din 'Umar 著ハーン・ウマール著の『Umar al-Jaylani's History of the Mongols in Persia』(Cf. *Mission d'Ollone: Recherches sur les Musulmans Chinois*, Paris 1911, pp. 26—27.)
- (四一) *Histoire des Mongols de la Perse*. pp. 325—327.
- (四二) *Ibid.* p. 325.
- (四三) D'Ohsson: *Histoire des Mongols*, Vol. 3, pp. 196—7.
- (四四) *Ibid.* p. 201.
- (四五) E. Blochet: *Introduction à l'histoire des Mongols de Fadl Allah Rashid ed-din*, Leiden, 1910, p. 163.
- (四六) P. K. Hitti: *History of the Arabs*, London 1940, pp. 377—78.
- (四七) *Ibid.* p. 683.
- (四八) *Ibid.* p. 378. じねはハーン・ウマールの記録に基いてる。
- (四九) E. Blochet: *Introduction à l'histoire des Mongols*, p. 163.
- (五〇) ペルシヤ語 Zich Falagi の音寫かと誤るべし。Falagi は天體 Zich は *Astronomical Tables* の義。
- (五一) ペルシヤ語 *usturlāb* (*astrolabe*) と翻譯があることだが、最後の「定」は疑問である。
- (五二) Blochet: *Introduction à l'histoire des Mongols*. pp. 88—90. じねはハーン・ウマール原文を参照せよ。
- (五三) *Géographie d'Aboulféda*, traduite de l'arabe en français par M. Reinaud, Tome II, Paris 1848, pp. 3—5.
- (五四) P. K. Hitti: *History of the Arabs*, p. 609.
- (五五) C. Brockelmann: *Geschichte der Arabischen Litteratur*, Band 1, Weimar 1898, p. 131. M. Reinaud, *Géographie*

d'Aboulféda, Tome I, Introduction, Paris 1848, p. 118.

(五六) P. K. Hitti: History of the Arabs, p. 609.

(五七) 小川泰堂「大士傳」頁二六一―二六二、及び日蓮上人御遺文、頁一五三一―三二。

(五八) 義和團の争亂のときは日本義勇隊員に加わつて活動した。服部宇之吉「北京籠城日記」(明治卅三年・博文館)には、山本氏は西本願寺留學生川上貞信氏とともに公使館附軍醫醫學士中川十全氏の助手となつてよく働いたとしてある。